

慎独と黙坐を重んじた人格の育成

# 池田草庵と青谿書院



慎独

文化財ミニパンフ

兵庫県指定文化財 史跡：青谿書院 昭和 45 年 3 月 30 日指定

## 池田草庵先生とは

草庵先生は江戸時代、文化 10 年（1813）7 月 23 日、宿南村の農家、池田孫左衛門の三男に生まれました。子どもの頃の幼名を歌蔵、大人になって通称を慎蔵と言います。儒学者として名は緝、字は子敬、24 歳頃から草庵と言うようになりました。18 歳で京都の四条室町にある相馬九方の私塾立誠堂（相馬塾）に入門しました。

相馬塾で学んでいた頃、生涯の友、春日潜庵に出会ってお互いに陽明学を学びました。23 歳の夏、相馬塾を出て京都梅宮に移り、さらに翌年には松尾山に移りました。松尾山では 6 年間、「終日坐して読む、古人の書」というほど、読書に専心しました。この頃、草庵と言うようになりました。天保 11 年 8 月、池田草庵 28 歳の時、春日潜庵の屋敷に近い京都一条烏丸西に私塾（池田塾）を開き、陽明学者としての池田草庵が確立しました。

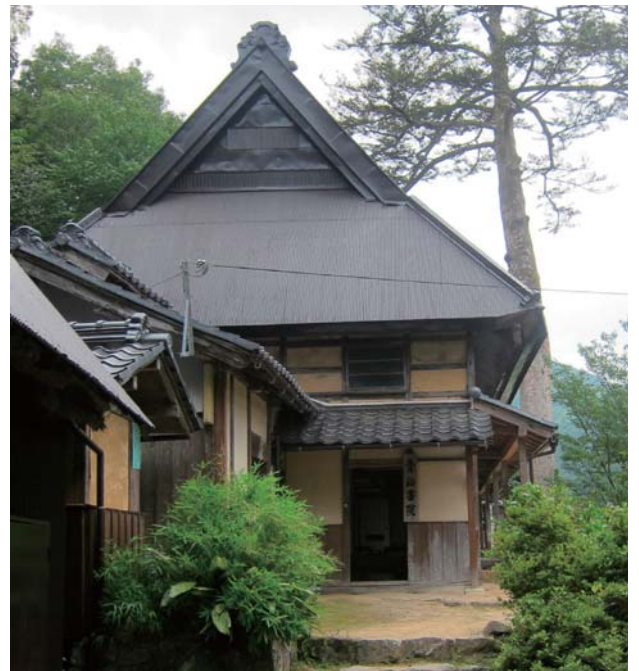
## 立誠舎と青谿書院

天保 14 年（1843）6 月、30 歳の時、草庵先生は八鹿村に帰り、立誠舎という私塾を開きました。池田盛之助・安積楽之助（理一郎）・国屋松軒・北垣晋太郎（北垣国道）など 62 人が入門しました。4 年後の弘化 4 年（1847）6 月 8 日、35 歳の草庵は、宿南村に青谿書院を建てて移りました。青谿書院は、青山川が流れる谷あいにある学校という意味です。明治 11 年 9 月 24 日、66 歳で亡くなるまでに立誠舎と青谿書院で草庵先生に学んだ門人は、合計 673 人になります。内訳は但馬内 383 人（養父市内 125 人）と但馬外 283 人、出身地不明 7 人です。但馬地方の農民の子ども達、全国 34 藩の武士の子ども達が学びました。功績をたたえ「但馬聖人」池田草庵と呼んでいます。

池田草庵の門人たちは明治 20 年 4 月、八鹿に私立山陰義塾（現在の小学校 5 年生から高校 2 年生までを教える学校）を設立しました。しかし資金が続かず、明治 28 年に閉校しました。そこで山陰義塾の関係者は県立学校の設立と誘致を推進し、明治 30 年、八鹿に県立簡易蚕業学校が開校しました。この学校は県立八鹿高等学校、県立但馬農業高等学校へと続いています。青谿書院は但馬地方の近代教育機関の源流になっています。



青谿書院 講義の間



宿南にある青谿書院

## 草庵先生の師と友人

弘化2年(1845)、池田草庵(33歳)は立誠舎を出発して、讃岐国多度津藩の元家老で、大塩中斎(大塩平八郎)の門人である林良斎(38歳)を訪ねました。この時初めて出会った二人は最も大切な学問上の友人として、「千古の心友」となりました。さらに伊予国小松藩で近藤篤山、広島藩で吉村秋陽を訪ね、さらに備中国松山藩で山田方谷に面会しました。その後京都で春日潜庵に会い、八鹿の立誠舎に帰りました。後に草庵の門人池田盛之助が林良斎の弘浜書院に入門し、林良斎の子息林求馬が青谿書院に入門しています。ほかにも草庵の友人には鳥取藩の中山大叔、柏原藩の小島省齋などがいます。

嘉永4年(1851)2月、草庵は青谿書院を江戸にむけて出発しました。3月28日には江戸幕府(昌平坂学問所)の儒官である佐藤一斎(80歳)を訪ねて講義を受けました。このため池田草庵は、日本儒学史では佐藤一斎の門人となっています。ここで呉康齋集という書物に出会い、学問修養の大きな転機となりました。佐藤一斎の門人には安積良斎・渡辺華山・佐久間象山・山田方谷・吉村秋陽などの著名人が多数います。池田草庵の師は、満福寺の不慮(弘実)上人、儒学者の相馬九方、幕府需官の佐藤一斎とされています。

## 肄業餘稿のことは

『肄業餘稿』は、草庵先生の言葉を490条にまとめたものです。草庵先生が塾生に対して諭した人格形成のための戒めの言葉であり、塾生が漢文を学ぶ練習に書いた言葉です。

- 1、志は高遠を期し、功は切近を貴ぶ。(19条)
  - ・理想は高く持ち、学問は身近に役立つことを重んじる。
- 2、人は欺くべきも、自らは欺くべからず。(143条)
  - ・人は欺くことができても、自分は欺くことはできない。
- 3、人の草木と同じく朽ちざる所以のものは、何ぞや。徳立ち、名成るにあるのみ。(211条)
  - ・人間が草木と同じように朽ちてしまわないわけは何であろうか。それは徳の備わった立派な人間となり、その徳が世にたたえられるようになる点である。
- 4、学を爲すは、例うれば猶、山に登るがごとし。辛きを喫し、苦しきを喫して、歩歩力を著け、而る後、能く千仞の高きに至る。高きに至れば則ち眼界自ら闊く、況味超然たり。(36条)
  - ・学問をすることは、例えれば、山に登るようなものだ。つらさを味わい、苦しさを味わい、一步一步力強く進んでいき、ようやく高いところに達する。高いところに到達すると、視界が自然と広く開け、今までの自分から抜け出し、高く超えたような気持ちになる。



青谿書院



草庵先生の銅像(宿南小学校)



草庵先生の門人帳



草庵先生の著書



# 但馬聖人池田草庵とその学問

# 池田草庵の年表

## 陽明学者の池田草庵（1813～1878）

池田草庵は、文化10年（1813）7月23日、養父市八鹿町宿南しゆくなみに生まれました。天保2年（1831）、京都へ出た草庵は相馬九方じゆくきやうに入門し、儒教を学びました。その後、陽明学やうめいがくを学び、天保11年（1840）京都一条烏丸西からすまに塾を開きました。天保14年（1843）但馬に帰り、八鹿村に漢学塾「立誠舎」を開きました。弘化4年（1847）には宿南村に「青谿書院せいせいのん」を建設し、立誠舎から移りました。

草庵は門人たちと青谿書院で共同生活を行い、「自分が独りであるときでも心を正しくもち、行いを慎むしんどく」ことを重んじる「慎独」の教えによって、知識と実行を兼ね備えた人間の育成に心をくぐりました。

嘉永5年（1852）、宇都宮藩こおりぶぎやう奉行岡田真吾の推薦で、宇都宮藩儒学者への就任依頼がありました。用人の待遇が与えられ、年収は200石で藩の上級武士になります。しかし「名声や金銭があっても学問はできない。清貧に甘んじて生き方を探り、郷里で人材を育てる」という理由で辞退しました。青谿書院で日本の近代化に貢献する人材を育てました。池田草庵は明治維新の時代に活躍した陽明学者ですが、倒幕運動家とは距離をおき、陽明学者や教育者として生涯を過ごしました。

### 立誠舎

天保14年（1843）から弘化4年こうかまで4年間、池田草庵が養父市八鹿町八鹿やうにんに開いた漢学塾。62人が入門した。建物は6畳が2部屋、3畳が1部屋、板間3畳が1部屋あり、土間の台所が付属する。建物は妻入り平屋建で、小規模な塾舎である。敷地内には時習寮があった。平成22年に整備保存事業が完成し、八鹿地区自治協議会が管理運営する。

### 青谿書院

弘化4年（1847）から明治11年（1878）まで31年間、池田草庵が養父市八鹿町宿南しゆくなみに開いた漢学塾。611人が入門した。1階は8畳が2部屋、6畳が4部屋あり、2階には5部屋ある。建物は妻入り2階建で、主屋は茅葺かやぶき、台所と奥の間が瓦葺となる。（財）青谿書院保存会が管理運営する。昭和45年兵庫県指定文化財史跡に指定される。



八鹿にある立誠舎

○1歳 文化10年（1813）

7月23日、宿南村に誕生。父は池田孫左衛門、母は政千代。4人兄弟の3男。幼名は歌蔵。通称は禎蔵。後に名は緝、字は子敬、草庵と号す。10歳で母、12歳で父が亡くなる。

○11歳 文政6年（1823）

十二所村、満福寺に入山し僧となる。名は弘補。

○19歳 天保2年（1831）

6月、満福寺を出て京都の相馬九方に入塾。

○28歳 天保11年（1840）

3月、但馬に4度目の帰国。豊岡藩で講義するが、仕官は辞退する。8月、京都松尾山を出て京都一条烏丸西に私塾を開く。

○31歳 天保14年（1843）

京都で吉村秋陽と交遊する。6月、八鹿村に帰って立誠舎を開く。

○33歳 弘化2年（1845）

8月から9月、多度津藩に林良斎、広島藩に吉村秋陽、備前松山藩に山田方谷、京都に春日潜庵を訪ねる。

○35歳 弘化4年（1847）

1月、『山窓功課』を書き始める。6月、宿南村に青谿書院を開いて移り、結婚する。

○39歳 嘉永4年（1851）

3月、江戸で佐藤一斎の講義をうける。

○40歳 嘉永5年（1852）

9月、宇都宮藩の儒官就任を辞退する。

○51歳 文久3年（1863）

8月、平野国臣が青谿書院を訪れる。10月、生野の変（生野義挙）が起こる。北垣・進藤・西村・鯉江の4名が加わる。

○53歳 慶応元年（1865）

1月から11月、豊岡藩で合計7回、31日間講義する。3月、福知山藩で講義する。

○59歳 明治4年（1871）

2月、豊岡藩主嫡男の京極武が入門する。9月、『中庸略解』完成する。

○60歳 明治5年（1872）

『古本大学略解』を刊行する。

○65歳 明治10年（1877）

3月、日置黙仙入門する。11月、病氣治療のため東京へ行く。

○66歳 明治11年（1878）

5月、東京から青谿書院に帰る。9月8日、「山窓功課」最後の記録を書く。9月24日、草庵先生没す。

# 池田草庵先生に学んだ人たち 私塾立誠舎と私塾青谿書院、そして豊岡藩校の稽古堂



## 琵琶湖疏水を開いた行政家

**北垣国道 (1836 ~ 1916)**

北垣国道は養父市能座に生まれ、天保14年(1843)7歳の時立誠舎に入り、その後も青谿書院で学びました。27歳の時、「生野の変」(生野義挙)が起こると、原六郎・西村哲二郎らと参加し失敗

しました。倒幕運動に身を投じ、坂本龍馬や勝海舟、千葉重太郎らと交わりました。

明治元年に鳥取藩士となり、応接方を勤めました。新政府では、高知県知事・徳島県知事を歴任し、明治14年(1881)第3代京都府知事に就任。明治23年に琵琶湖疏水を完成させました。明治25年に北海道庁長官に就任。草庵先生を終生の師としました。男爵。



## 東大総長を二度つとめた

明治の教育者

**浜尾新 (1849 ~ 1925)**

浜尾新は豊岡藩士で、豊岡藩校の稽古堂で草庵先生に学びました。明治2年(1869)、藩費遊学生に選ばれて東京に出ました。明治6年、アメリカに留学します。

帰国後、東京開成学校の副校長となりました。明治10年には、校長の加藤弘之(出石藩出身)と協力して東京大学に昇格させ、副総理となりました。さらにその後、2度、総長を務め、その在任期間は11年4か月になりました。文部大臣に就任、東宮太夫として昭和天皇の教育係、また枢密院議長にも就任しました。男爵ののち子爵となりました。



## 日本金融界の基礎を築いた銀行家

**原六郎 (1842 ~ 1933)**

原六郎は朝来市佐中の進藤家に生まれ、21歳の時青谿書院を飛び出し、「生野の変」に参加しました。挙兵失敗の後、倒幕戦に参加しました。明治2年(1869)鳥取藩の藩士となり、1年間アメリカへ留学しました。エール大学やイギリスで経済学を学びました。

明治10年に帰国し、鳥取に第百国立銀行を設立しました。その後明治16年に横浜正金銀行の頭取となり、日本の外国貿易金融の基礎を築きました。同志社大学の設立を支援し、山陽鉄道会社、北海道鉄道会社、東武鉄道会社、総武鉄道会社などの設立に尽力しました。

明治10年に帰国し、鳥取に第百国立銀行を設立しました。その後明治16年に横浜正金銀行の頭取となり、日本の外国貿易金融の基礎を築きました。同志社大学の設立を支援し、山陽鉄道会社、北海道鉄道会社、東武鉄道会社、総武鉄道会社などの設立に尽力しました。



## 日本近代眼科の父

**河本重次郎 (1859 ~ 1938)**

河本重次郎は豊岡藩士で、豊岡藩校の稽古堂で草庵先生に学びました。13歳の年に豊岡出身の猪子止戈之助、和田垣謙三らと吉村寅太郎に連れられて東京に出ました。明治18年(1885)ドイツに留学しました。明治22年、東京大学医学部眼科学教室主任教授となり、33年間職責を勤めて日本の眼科水準を発展させ、「日本近代眼科の父」と賞賛されました。

回顧録には、草庵先生の思い出を「稽古堂の広間でやうやく列座して講義をきいた。先生は大変有名で、門下生が諸国から来て学んでいた。先生の学問は陽明学で、もっぱら実践を専一とされた」と記しています。

回顧録には、草庵先生の思い出を「稽古堂の広間でやうやく列座して講義をきいた。先生は大変有名で、門下生が諸国から来て学んでいた。先生の学問は陽明学で、もっぱら実践を専一とされた」と記しています。

## 吉村寅太郎 (1848 ~ 1917)

豊岡藩士。文久元年に青谿書院で学び、明治2年慶應義塾で教師を務める。明治6年(1873)に文部省に出仕し、第二高等学校(現東北大学)初代校長、第四高等学校(現金沢大学)校長などを務めた。

## 久保田譲 (1847 ~ 1936)

豊岡藩士。久保田精一の弟で、兄弟は元治元年(1864)に青谿書院に入る。明治4年文部省に入り、明治7年に広島師範学校(現広島大学)初代校長、明治36年に文部大臣となる。男爵。

## 森周一郎 (1838 ~ 1920)

新温泉町浜坂出身。安政4年、20歳で青谿書院に入り12年間学ぶ。明治3年、浜坂に味道館を開き、後に鳥取に移し、千人の門人に教える。森梅園という。正三位。

但馬豊岡藩	但馬出石藩	但馬村岡藩	丹波福知山藩
丹波柏原藩	丹波篠山藩	丹波亀山藩	丹波園部藩
丹波峰山藩	丹波宮津藩	丹波田辺藩	播磨三日月藩
播磨福本藩	讃岐多度津藩	讃岐丸亀藩	周防徳山藩
周防岩国藩	因幡鳥取藩	美作津山藩	肥前平戸藩
和泉岸和田藩	下野宇都宮藩	武蔵川越藩	備前岡山藩
肥後人吉藩	阿波徳島藩	安芸広島藩	加賀金沢藩
大和柳本藩	近江膳所藩	伊勢菟野藩	常陸水戸藩
上野前橋藩	丹後舞鶴藩		合計 34 藩

## 江戸時代の藩別、武士の入門者

但馬 383	丹波 73	丹後 26	播磨 26	讃岐 26	周防 16
摂津 12	因幡 11	美作 11	肥前 11	和泉 8	下野 7
山城 7	武蔵 6	備前 5	肥後 5	伯耆 4	阿波 4
安芸 3	伊勢 3	常陸 3	加賀 3	伊予 3	長門 2
備中 1	大和 1	紀伊 1	近江 1	若狭 1	豊前 1
尾張 1	美濃 1	不明 7	32 か国、合計 673 名		

## 江戸時代の国別、門人の出身地